

あを 9
2016





版画 武井石艸

汽車を待つリュックごろ寝の何処かに蟲 堀内一郎
仰ぐ夏山戦のかたみゲートル締め
尾瀬見えておどろく樅の匂ひ俄
いち早き秋雲を見し睡魔来る
白樺は尾瀬の墓標として霧に
朝霧を来る若人の声から先
残鶯に鳴かれ帰心のまたとほのく
残鶯にはげまされ行く旅も果て

水音 昭和 35 年 8 月

あを

九月



東京 佐藤 喜孝

コトバカリ

一生涯林檎の皮は噛み切れぬ
夢殿は居留守のやうに暮の秋
こちよこちよと窓で手まねき秋小雨
朝顔に蟻あくびして背伸びして
人參に人氣のありて保育園

石川 定梶じょう

風鈴

洋館が建つ丘のへの入道雲
ちはやぶる神代もゆだち西よりす
出帆の水尾の重たく油照り
サングラスかけゐて手持ち無沙汰かな
ひと雨が来さう風鈴鳴り出だし



埼玉 須賀 敏子

七月よ

七夕や青き地球にテロリスト
夏帽を選ぶその日をいとしめば
母の住む団地に送る葦簀かな
炎昼に一票投ず有り無しや
七月よ二人を悼む永・巨泉

埼玉 竹内 弘子

螢

火星濃し誰を恋ふるにあらざるも
眦に雷ほとぼしる遠青嶺
いくたびも手が空をきる螢かな
あをくさくかたくつめたき螢なれ
くちづけに似て火口湖の霧まとふ

東京 田中 藤穂

梅雨の蝶

秋待たず逝きにし人よ夜の雨
梅雨の蝶寄るべき花のなくなりし
佃島葦簀の蔭に猫二匹
浜へゆく石段険し合歡の花
花山葵黒猫を抱く夢二の絵

石川 中川 旬寿夫

危な絵

羽拔軍鶏びた一文も出さぬなり
優曇華や大きな声をたしなまる
遣り繰りの下手な分だけ茄子太る
仔犬の名ロンドとハリー冷房中
祖父のものかも危な絵を曝しけり



三重 長崎 桂子

猛暑

夏菊の艶は控へ目午後すがし
梅雨湿り畳に過す時多し
店先や新種の瓜の目を引く黄
大風とそよ風起す洩団扇
繰り返す高温湿猛暑耐へがたし

東京 森 直子

犬が空を見る

待たされし犬が空見る墓参り
弁財天にラップ流るる梅雨の小路
裏通り表通りに梅雨の月
最果ての岬先まで草茂る
夕立を眺めるビール飲み乍ら

東京 森 理和

入道雲

無人 駅 嶺より昇る 入道雲
薔薇満開隣家は育て見ぬままに
暑い暑い鎧となりし暑さかな
梅雨晴れ間カアカアと鳴くばかり
朝一番ミンミンが啼く直ぐ雨に

埼玉 山莊 慶子

青葦

子鴉の甘え尽して日暮れどき
白靴や若冲展に並ぶ朝
浅き夏句集残して旅立てり
雲海の切れ目に青き瀬戸の海
青葦の鋭き涼の沼覆ふ



埼玉

秋川 泉

夏の星

夏の朝鏡の中に母を観る
ひとときの子守のはずが夏の星
夏の怪あきらめてゐた猫もどる
かくれんぼ葦簀の陰に足が見え
七夕や輝く星の大往生

山梨

井上 石動

位置変へぬ宿題帳ぞ雲の峰
盆地にて遭ふほほゑみの涼しさよ
腰に鴨川を感じて鱧の皮
玉まつり天の磐舟にて来ませ
尻腰の見ん事丈夫茄子の馬

埼玉

大日向幸江

明日は明日

月下美人ふらんす窓に香りたる
テーブルの上を指すや蟻の列
子雀にマリーと名付け埋葬す
明日は明日雨降る夜は海鞘を食べ
朝方の心地良き風日々草

千葉

黒澤 佳子

新茶

若冲展日傘日傘や又日傘
庭手入れ汗ばむシャツや帽子まで
新茶淹れ変らぬ香り三十年
紫陽花に鎌倉行こか独りでも
カクテルの薔薇のアーチに立ち止まる



東京 佐藤 恭子

はな

離るがまま土におちつく夏落葉
菖蒲からあやめに通ふ風微か
終のいろ残し花梨の花落下
隠沼や揺れやまずゐる含羞草
近近のあぢさゐ小さき灯かな

東京 七郎衛門吉保

信州・能登旅

御柱疵誇らし気立ち姿
子の捕りし蚩二つや悲喜の籠
能登突端隣国遠し白日傘
残照や化粧仕舞の千枚田
遠浅の葦簀に躍る子の手足

東京 篠田 純子

てのひら

手のひらの大きをぢさん踊りけり
井戸ポンプ硬しや汗の掌
岩角に水掻き貼りて鵜の眠る
街灯の当る所のはぜの稚魚
池の辺に蓮のにほひの汗拭ふ



手首まで入れて遊べる夏の海 佐藤喜孝

ルーティーンして熱き銭湯子どもの日 篠田純子

びわの実や買はむともへばもう愉し 定梶しょう

夏浅し今日の日付のママレード 須賀敏子

花篝ひとにはぐれて人混みに 竹内弘子

業平忌老ゆれば迷ひなき月日 田中藤穂

ひらひらと尼さまが往く水飢饉 中川句寿夫

行き帰り山法師の花輝けり 長崎桂子

若者を吐き出す門や青嵐 森直子

卓上に庭の鬼百合反り返へる 森理和

悪い子も良い子になってさくらんぼ 赤座典子

夏菜莢のかすかな甘さピアノバー 秋川泉

いつときの雨の入日や金魚玉 井上石動

たわわなる乳房をもちてアマリリス 大日向幸江

蛭の月にとけゆく高みかな 佐藤恭子

玉の葉ときそひがほなる花石榴 七郎衛門吉保

喜孝抄



るいま



捨て鐘をききもらしたる白蓮

佐藤喜孝

うっかり白蓮は捨鐘を聴き漏らし、開くのが遅れたとの句意と解釈しました。まだ蕾から解かれきっていない白蓮は、清楚で可憐な少女のようです。蓮の花がアルカイックスマイルを浮かべているようです。(純子)

ルーティーンして熱き銭湯子どもの日 篠田純子

作者は今様言葉に興味がある。ルーティーンもラグビーの放送で聞いたことがあるがわたしには解ったようで解らない。早速ネットのお世話に。「きまりきった仕事。日々の作業。ルーチン ワーク。」さてこれでは掲句の理解に役立たぬ。もうすこし探ってみると、「スポーツ

で言えば「型にはまった一連の動作」とあった。熱き湯に入るための子供なりのルーティーンがあるのだらう。どんな手順があるのか書くのも表現の一法。(喜孝)

梅雨の蠅打つにちからや且つ逃がし 定梶じょう

完璧と思われる方の、失敗談的俳句は読み手をほっとさせてくれます。しかし事実は宮本武蔵のように、「飛んでる蠅を箸で挟んだぞ」と言う結果だったのではないでしょうか。(純子)

びわの実や買はむともへばもつ愉し 定梶じょう

時間の止め方がおもしろい。きっと目の前には売り物の枇杷の実がある。枇杷が好きな人なら枇杷の実を見つけただけで愉しくなる。作者

は次ぎの段階に進んで買はんと思った。買ひ求めたかだうかはこの句では問題ではない。誠に心のビデオテープの止めどころの愉しい句である。(喜孝)

木道の少し傾く山開き

須賀敏子

戦場ヶ原か、尾瀬ヶ原のような平坦な所の木道と思いました。残雪も所々にあり、池塘にちよろちよると雪融け水の流れる音も感じられます。(純子)

夏浅し今日の日付のイヤミレード

須賀敏子

すつきりとした表現ながら一日の充足感が表現されてゐる。俳句は省略と云ぶが一朝一夕では理解できないもの。おしゃれな一句。(喜孝)

梅雨ふかし灰のにほひに母のにほひ 竹内弘子

この句の灰の匂いは、灰の中に埋けておいた芋を母親が取りだして灰を払い、手渡してくれた時の懐かしい、嬉しい匂いなのでしょう。灰の匂いは空腹を満たしてくれる母を連想させてくれます。(純子)

蛍火のしづまりてまた星空に

田中藤穂

中学生の時、仙台の青葉城で蛍を見たことをおもいだしました。沢山の蛍が舞い飛び、東京では見た事もない満天の星空の、素晴らしい光景でした。作者と感動を共有致しました。(純子)

業平忌老ゆれば迷ひなき月日

田中藤穂

紫陽花の句も蛍火の句もおもしろかった。掲句この作者にしてこのやうな句が、と興味を持った。「業平忌」は五月二十八日、しかし季語としての季節感はない。業平のことはよく知らぬが、

掲句は以前には迷ひがあったとも読める。しかし眞実は老いても迷ひがあるのだらう。といふ反語として読むのもおもしろい。(喜孝)

ひらひらと尼さまが往く水飢饉 中川句寿夫

水飢饉と言う緊急事態にもかかわらず、夏物の法衣の尼さまがひらひらと飛ぶように歩いています。何か可笑しみを感じつつ、長閑な風景が浮かんで来ます。(純子)

新緑の空広闊に最な青 長崎桂子

新緑の空に、どれだけ贅辞を並べても足りない作者です。「広闊」と、「最な青」の語彙に魅力を感じました。(純子)

知らぬ間に咲いては散つて夏椿 森直子

私の住宅の植込みに夏椿がありますが、いつ

夏茱萸のかすかな甘さピアノバー 秋川泉

ピアノバーで、夏茱萸の浮くカクテルを味わうと言う、状況からして素敵です。黒人のピアノリストが、リクエストに応じて曲を弾き語ります。ピアノの上の大きなブランドグラスには、チップが溢れそつです。(純子)

ソーダ水ギャルソン・ニノの髭細し 井上石動

ギャルソン・ニノは、瞳がブルーのフランス人。若い頃からさりげなく気配りのきく、ニノ目当ての客もいます。歳を重ねて渋みを増した彼の、休憩中に飲む「ソーダ水」の習慣は若い時と変わりません。(純子)

いつときの雨の入口や金魚玉 井上石動

いつときの雨とは驟雨か夕立、通り雨のたぐ

も散っている花を見て、木を見上げ咲いているのを確認します。上品で控えめ故に、憐れさを感じる夏椿は素敵です。(純子)

卓上に庭の鬼百合反り返へる 森理和

丁度、テーブルに飾って在る様な位置に、庭の鬼百合が程よく見えていたのでしょう。反り返り開ききったとのこと。借景のように、卓上にある様で実際には庭にあると言つ、諧謔が面白く思いました。(純子)

悪い子も良い子になってさくらんぼ 赤座典子

いつもは、言うことを聞かないのに、さくらんぼをどうぞと言われると、自ら手を洗い、椅子にきちんと座り「いただきます」とお礼口さんになります。作者は巧妙に良い躰けをされているようです。(純子)

ひであらう。その雨が止んだ後の入日、殊更に美しさが伝はる。そこに空中に浮かぶ金魚玉がある。魅惑的な朱で統一された世界が広がる。(喜孝)

モネの睡蓮静寂に石を投げ 大日向幸江

モネの絵画のような睡蓮の池に、石を投げ込む作者に、現状を変えたい願望を感じました。あまりに静かな睡蓮の池にショックを与えたら…。しかし何事も無かった様に、静寂に戻る池の様子が想像されます。(純子)

蛭の月にとけゆく高みかな 佐藤恭子

低い位置(しゃがんで)から、蛭を見ているように思いました。蛭を追って見上げると月。蛭の光は月光と重なり見えなくなりました。とけゆくとの表現に、淡いロマンを感じました。

(純子)

樹木墓地槐の元に母還る

七郎衛門吉保

樹木の下にお母様を、埋葬されたのでしょうか。槐が、延寿を想像させ、明るさも感じられます。(純子)



比来披見

ホトトギス 八月号	稿債のはかどることも夜の秋	稲畑 汀子
	昨夜信濃今宵摂津の夜の秋	稲畑 廣太郎
沖 八月号	上総みな青嶺といへど高からず	能村 研三
雨月 八月号	老鶯の声称ふれば又鳴きぬ	大橋 暁
槐 八月号	影生まれ箱庭の景定まれ	高橋 将夫
馬酔木 八月号	作り滝なれど心にしづぎ浴ぶ	徳田千鶴子
風土 八月号	青蘆をゆさぶり来る投網打	南 うみを
京鹿子 八月号	青梅雨のはぐれ鴉の胡乱なる	鈴鹿 呂仁
六花 八月号	すいれんに包まれあたる一つ岩	山田 六甲
鳴 八月号	啞蝉の方尺間かにじり寄る	井上 信子



寄せものに沈めて赤きさくらんぼ	高橋 道子
万象 八月号	
だいだいの転がる路地やまた一つ	大坪 景章
春燈 八月号	
夏山となりてや寛に桜島	安立 公彦
末黒野 八月号	
雲を洩る日差しを返し夏つばめ	小川 玉泉
葉桜や芭蕉句碑より道岐れ	松本三千夫
雲の峰 八月号	
子ら沸けるごと廃校のカンナ咲く	朝妻 力
萱 八月号	
胡瓜咲き姉弟論語を読み下す	木村 嘉男
まくなぎの高さが顔の真正面	亀田虎童子
尊池ひとめぐりする時間かな	小島 良子
朝 八月号	
はるかなるものを指しては踊るなり	岡本 眸
こだま 六月号	
黄花コスモス今日の散歩の一里塚	松林 尚志

(喜孝抄)

毎月15日発売 定価100円(税別) 月刊 **俳句界** 2016年10月号

【特別】源義と春樹
一受け継がれた俳句の魂

○インタビュー 角川春樹
○巻頭言 山本せじ子 青柳紫雲
大坪卓 佐川広樹 瀧瀬 小島良子
○源義・源義代親知知 ○源義と春樹
○河上五郎太郎の俳句観
○源義と春樹の俳句観

新主宰、新編集長大就任
目下新7月号 小島良子 大坪卓
副編集長 佐川広樹 瀧瀬
編集委員 山本せじ子 青柳紫雲
田村幸生 大坪卓 吉田千早 三宅あや
藤田一子 小島良子 小島良子 小島良子
発行所 文芸春秋 文芸春秋 文芸春秋
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

俳句界NOW 鈴木裕之・久留米衛二
【特別】たむらちせい
【特別】村上春樹子 才助 祥子 柳屋 祥子
本誌と「俳句界」 中西夕紀
【特別】中内亮玄 「源義」

佐藤あゆみ「源義」コンテナー
山根清世「フリーメソロジー」

株式会社文学の森 TEL 03-6282-9196 URL http://www.juugui.com

俳境流連

嬰の声に梅雨の最中へ猫とび出す 恭子

春ともなると、夜昼関係なく春猫の独特の鳴き声が聞こえてくる。猫が好きでない人には、騒音でしかないのだろうと思っている。誰に教えられた訳でもないのに、我が家の周辺にいる猫は同じように鳴く。遺伝子がはたらくのであろうか。東日本大震災後（大怪我をして帰宅）は外に出してない。しかし鳴き声が聞こえると、窓の敷居に上つて耳をすませている。密かに外へ行きたいだろうになあ、と思うがやっぱり外には出せない。野良の子猫が家に居ついて十三年になる。夏は自分の好きな涼しいところに寝ているが、少し寒さを感じるようになると、布団の中に無理やり入つ

てくる。最近特に、四六時中付いて回っている。今もこの原稿を書いていたら、私の顔を見上げながら足の間割り込んできた。安心したような顔をして、寝てしまった。気持ちしがらぐひとときである。

鏡掛すこしひらくと磯衛 喜孝

父は絵描きになりたく紹介人に連れられて行った先が夕張探鉱の壁張職であった。父の悪戯描きはいくつか遺つてゐる。わたしが子供の頃は父の手作りの凧が自慢であった。夏休みの工作も苦労しなかった。障子張のときは鷲や千鳥など切り抜いて手掛けに貼つてゐた。ところが私を含め子供は全く絵は苦手、私など子供に描いた象にルビを振る始末である。父の曾孫が今のところ絵が好きである。少しは期待をしてゐる。

あをキーワード俳句辞典（こねーこは）

捏ねる

叩き付けパン生地捏ねる五月かな 森 理和
バス停の大蜘蛛蠅を捏ねまはす 篠田 純子

木の間

木の間よりぬつと妙高山遅桜 田中 藤穂
木の間より蜘蛛の糸垂る白昼夢 早崎 泰江
春の雲木の間隠れのランドセル 佐藤 恭子
立冬の木の間の光まぶしめり 芝宮須磨子

好み

亡き夫の好みし土筆煮てをりぬ 関口 ゆき
初蝶や好みし花を探しをり 鈴木多枝子
下萌の土を好みて犬歩く 山莊 慶子
煮凝を好みし夫でありしかな 芝 尚子
ぼたぼたの熟柿好みし母なりし 芝 尚子
山栗のそのちいさきを好みけり 須賀 敏子
炉開や好み小紋駢取る 森山のりこ
何色が御好みですか櫻草 長崎 桂子
向日葵を好みし画家の若く逝く 早崎 泰江
冬の蠅老猫の背を好みをり 鎌倉喜久恵
放牛の好みし向きや夏の草 鈴木多枝子
葉桜や多喜二は雨の日を好み 森 理和
ひひらぎを好み啄む青い鳥 大日向幸江

好む

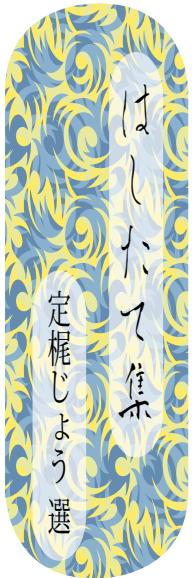
弱冷房車好む姉妹の遠出かな 篠田 純子
唐辛子辛辣好む若い人 芝 尚子
わが好む鯨べーコン秋元忌 定梶じょう
木と紙の家を好むや地虫鳴く 鎌倉喜久恵
三味の音を好む人居り冬座敷 大日向幸江

この世

愛憎はこの世でのこと盆の花 田中 藤穂
したたかにこの世を生きて冬薔薇 栢森 定男
臍の緒を切られこの世の今日の月 東 亜 未
雪霏罪とこの世の音を消しつ積む 木村茂登子
あの世この世一緒に願ふ梅雨の寺 森山のりこ
唱名があこの世この世を秋彼岸 芝宮須磨子
夏衣この世斜めに見て過ぐす 芝 尚子
四五年はこの世に長居豆を撒く 堀内 一郎
大朝寝この世の他の人に逢ふ 篠田 純子
已にして芋殻のこの世ならぬ軽さ 竹内 弘子
この世での母は紫実むらさき 篠田 純子
花吹雪この世で会へぬ人想ふ 早崎 泰江

琥珀

持込みし琥珀の酒や夜寒宿 赤座 典子
風に揺る空蟬ひとつ琥珀色 森山のりこ



りて梅雨終はる。」

スーパールのちちし半分鰻かな

「ちらし半分」が曖昧。「新聞のちらしや土用鰻の目」

御土産の厚手のグラス冷素麺

「御土産」が利いていると思えません。「つけ汁の厚手のグラス冷素麺」又は「ガラス製厚手の皿の——」か。

須賀敏子

田中藤穂

梅雨明けの周期律表ニホニウム
軽震の時々ありて梅雨終はる
スーパールのちちし半分鰻かな
御土産の厚手のグラス冷素麺

梅雨明けの周期律表ニホニウム

周期表に新しく載せられた元素。敏子さんが、早くも句にとり込んだ。梅雨明けの報に、そつだ、ニホニウムの報もあったんだ、と。

軽震の時々ありて梅雨終はる

時々ある地震、がやや当りませ。「軽震のたまたまあ

飛躍が句を面白くします。

九十九湾海月を分けて船進む

24

25

散文の語序で書かれています。「海月分き分け九十九湾船進む」。「分き分け」は、「分く」が「わきて」「わけて」と両用に遣えることを書き分けたもの、です。

葦障子海の風くる蕎麦処

上五と座五をひっくり反した措辞の方が俳句らしくなる、とおもいます。「蕎麦処海の風くる葦障子」

あの世めく踊の手振り盆の夜

俳句の約束では「踊」一語で盆踊を指すことになっ
ています。「盆踊手振り身ぶりのあの世めく」

盆提灯うごきて何かものの影

佳句。謎めく措辞も盆提灯だからこそ。

黒澤佳子

茹で上げた枝豆に振る能登の塩
背丈ほど続くカンナや一頻り
藕糸蓮句の浮かびをり近づけば

長崎桂子

大潮の干潟の占める車窓の夏
真夏日の眩しさや一滴して
生垣の育ち黒ずむ茂りかな
炎熱や小川は風の通る道

茹で上げた枝豆に振る能登の塩

いつの間にか能登産の塩が名物の如くになっているようです。「茹で上げた枝豆に振り。能登の塩」。

背丈ほど続くカンナや一頻り

「背丈ほど続く」が内容を曖昧にしています。カンナの高さが背丈ほど、なんですから「背丈ほどのカンナや一頻り続く」。カンナの咲きつづく距離を「一頻り」と表現すること、私には思いつかない。うまい表現。

藕糸蓮句の浮かびをり近づけば

「浮かびをり。」は、時間の継続をいつことば。「藕糸蓮句の浮かびをり近づけば」。

長崎桂子

大潮の干潟の占める車窓の夏

「干潟に大潮」ならともかく、「大潮の干潟」は怪訝。「夏潮が潟を占有車窓かな」。

真夏日の眩しさや一滴して

「ひとしづくして」は「したたり」のことでしょうか、あるいは「真夏日」がすでに言うてありますので水栓の一滴のことでもあるのでしょうか。「水栓の一しづくして夏旺ん」。

生垣の育ち黒ずむ茂りかな

「育ち」が不要。「生垣の黒ずむまでの茂りかな」。

炎熱や小川は風の通る道

おもしろい。「炎熱や」と置いたために、中七以下が随分涼しく感ずるのです。

七郎衛門吉保

一坪の菜園に来るみんなが
初恋や始めて食べるかき氷

白鷺の頭の見えて葦の原 里山の雨を弾いて青葡萄

先頭の句は上五中七と座五の間に明らかヒロケーションの違いがあって、「見えて」に休止があります。一方「里山の」の句は一本調子の句ですから何処かにポーズ(休止)が欲しい。「里山の雨を弾けり青葡萄」。

一坪の菜園に来るみんなが

野菜畑にみんなが来るとしたら、落ちて死ぬる時、ではないでしょうか。あるいは、「一坪の」も言わずもがな、と思つのです。「菜園にあてみんなの声とびく」。

初恋や始めて食べるかき氷

「初恋や」と切ったがために、生まれて初めてかき氷を食べる、のようにとられかねない。初恋の人と始めて食べる、というところでしょつから、「初恋

漫ろ雨浴衣はしよりの銀座裏
草雀り五分刻みのストレッチ
門札を換えて早や逃げ夏童
風灼けてざわざわと糸満に

草雀り五分刻みのストレッチ

「五分刻み」とまで言わぬ方がよろしい、と思います。「草雀る時にストレッチを交へ」。

門札を換えて早や逃げ夏童

「夏童」が無理筋。「門札を付け換へ逃ぐる夏休み」

風灼けてざわざわと糸満に

沖繩戦終焉の地「糸満」。だから「ざわざわ」の擬音が効いているわけで、「灼けるの季語を助けている」。「糸満やざわざわと風灼けて」。

大日向幸江

白鷺の頭の見えて葦の原
里山の雨を弾いて青葡萄

の始めて食べるかき氷」としたほうがわかりやすい。

秋川 泉

棚経の僧走りをり神楽坂
病む友の窓辺にひらく虞美人草
夕富士や風にゆらぎて矢車草
さわさわと雨降りかかる木下間

棚経の僧走りをり神楽坂

坊さんと神楽坂。随分面白い。けれど、「棚経」とあれば仏壇に面しておつとめ中の僧をイメージしてしまいます。それが「走りをり」ですから違和を感じます。「棚経へ僧急ぎをり神楽坂」。

病む友の窓辺にひらく虞美人草

一本調子。めりはりがありません。「病む友や虞美人草が窓の下」。

夕富士や風にゆらぎて矢車草

「矢車草」。佳句です。上五に「夕曇りや」と据えて、どんな花でもいいよつだが、やっぱり「矢車草」が合う。

さわさわと雨降りかかる木下間

なるほど、下間に居て降り出した雨はさわさわ。降りかかる「がうまい」。

森 理和

ちゅんちゅんと白む窓辺の緑かな
朝顔は青色の鉢投票日
白旗や葦簀の陰で砂落す
水輪から水輪の尾緒乱す梅雨

ちゅんちゅんと白む窓辺の緑かな

雀と窓辺の緑。夏も長けた、という頃の朝明け。ただ、「窓辺の緑」の措辞がやや凡。「ちゅんちゅんと窓辺の白む緑かな」

朝顔は青色の鉢投票日

「朝顔は」とあります。「青色の鉢がよろしい」とい

うことなのでしょつか。「投票日」が上手に置かれて、いるだけにもつたいない。「青色の鉢の朝顔投票日」。

葡萄蔓棚より垂らし西日除く

「垂らし」は他動詞。俳句で自動詞他動詞どちらを遣ってもいいようなら、おおよそは自動詞を遣うべき。「葡萄蔓棚より垂れて西日除く」

白旗や葦簀の陰で砂落す

いい句です。「白旗や」と据えたところが好ましい。もしかしたら「氷店」？。

佐藤恭子

九窮に梅雨の湿りの満満す
水輪から水輪の尾緒乱す梅雨
明日へと思ひをせし落椿
戩草や玉響の風におされぬし

九窮に梅雨の湿りの満満す

上五。もしかしたら「九窮」ででしょうか。あるい

は「満満す」。漢文では名詞に動詞「す」を付けて詩文につかいます。「早朝」に「せず」をくつつけ「早朝せず」（朝早くに政務を執らない）と表現するのもそつでしよう。でも名詞ではない。「満満」に動詞「す」はつけぬし。

水輪から水輪の尾緒乱す梅雨

「水輪の尾緒」がうまい。
明日へと思ひをせし落椿

戩草や玉響の風におされぬし

「玉響」がわかりません。十葉の匂いの形容なん
でしょつか。

中川句寿夫

代筆を妻が拒みて土用蛭
遠山の雲吐き切れず風知草
似合っても似合はなくとも登山帽
あゝ言へばかつ言ふ田水沸きにけり
朱く朱き酸漿を淡墨で画く

代筆を妻が拒みて土用蛭

知人に「ものすごく」というしかない悪筆の男が居まして常々、何とまあ、と思っていたのでした。私を感じていると同様のことをその彼が私の字に対して感じていることを知って仰天したことがあります。が、家内に言わせると、どっちもどっち、なんだそつで、相身互い身と握手したことがあります。ですから、同程度の字を書いた家内が私の代筆なんぞ絶対にしなかつたのは当然。拒否拒絶することを貝の口に準えることがあります。それが「土用蛭」。

遠山の雲吐き切れず風知草

青空が覗いているけれど晴れ切れない。降りそうかと言えはそうでもない。そんな遠山を見て立つ作者の足もとに「かせ草」。ないよつで風がある。

朱く朱き酸漿を淡墨で画く

破調。句寿夫さんの以前所属した俳誌では、定型しか載ることがなかった。だから、数年前に作った

掲句を発表する機会がなかった。水墨画を勉強したことのある人の一句。

佐藤喜孝

牡丹のうごかぬときに雀くる
大寺の障子がうごく紅牡丹
大川のうごかぬところ盆あかり

牡丹のうごかぬときに雀くる

鑑賞が難しい。牡丹は、少々の風にそよめく花ではない。そこで気がついたのです。泰然と咲く花を「うごかぬ」と形容し、配するに雀。それも子雀がいい。牡丹に小雀の図柄。あるでしょうか、たぶんないはず。

大寺の障子がうごく紅牡丹

「牡丹寺」と称する寺院が諸処にあつて、どこもみな見事なものらしい。そして本堂には大きな障子戸が立てならべられているのです。大寺とあれば障子戸の多さはなおさら。その一枚に焦点をあて、牡

丹の赤さと対比した。ともかく表現が確か。

大川のうごかぬところ盆あかり

「盆あかり」がやや難しいが、燈籠流しの類いの「あかり」ではないでしょう。東京で大川とは隅田下流域をいうそうですから、両川岸には建物群が建ち並び。その「明かり」が届くところ。川の中心と川沿いの、その間辺り。流れの最も見えにくいところ。よく見ているのです。

因みに今月号の投句、黒澤さんと喜孝さんが三句でした。投句用紙に五句の欄が設けてあつてもむりに五句書く必要、さらさらないと思います。昔むかし、所属した俳誌の主筆者（ある大学の先生）。その弟子の一人が入会早々の私に「成績を上げたかつたら投句を休まないこと。休俳することをウチの先生は最も嫌う」と諭したのでした。ハテ投句の数と成績に何の因果があるうか、と思つたことでしたが、今でも確かにそんな先生がいます。学校の授業と一緒にしたにしているわけで、幸い私は俳句の先生ではありません、どうぞ遠慮なく休俳なさつて下さい。残暑きびしい折、ですから。

傳句会

席題 酷暑

八月九日 カフェ傳

黙禱を済ませ句会へ長崎忌 敏子
盆の僧休みになれば映画館 理和
落蟬にうごかぬものとうごくもの 喜孝
地表から立ちのぼる日の酷暑かな 泉
葛香る道のひらけて日本海 敦子
蓮のつゆ啄む二羽の雀かな 恭子
靴緩く履きて男の子子夏休 典子
蝦夷地にも酷暑運びし新幹線 吉保
謁諷謁諷と首振る古き扇風機 純子
帽子みなゆるくて夏を老ひにけり 藤穂
緑陰のここと決めたる雀たち 綾子
酷暑なり山ノ手線のドアー開く 佳子

あをやぎ句会

八月二十日 京橋プラザ区民館

終戦日鯉はうしろを向けません 恭子
はたた神コンビニに買ふ野菜かな 由子
六番線より乗りあはせたり瑠璃揚羽 純子
つぎつぎに寄せるさざ波夏の鴨 綾子
エスカレーター乗れずカメムシ腹見せり 大佳
まどろみて川辺にジャーと鳴る声 泉
カタカナの祖母の文あり終戦日 恵子
蛇口より水洩れてゐる原爆忌 直子
荒波に触れつつ沖へ秋の蝶 敦子
やや遠い木へ移りけり法師蟬 藤穂
ころんだのかねころんだのか秋の雲 喜孝

あとがき

俳

界の九月号に六句掲載させていただいた。機会がございましたらご笑覧下さい。この号に『萬緑』が来年三月で廃刊と聞き驚いた。わたしは武井石艸主宰の『水音』に。数年して主宰と相談萬緑が暖流も入らうと思った。どちらにしようか迷った。萬緑は月刊誌といってもそのころは不定期刊行であった。初心者には毎月きちんと発行される俳誌の方が勉強になるし、また「十七音基準律・無季容認」との旗印に賛同し入会した。将来作るかもしれないぬ「無季」が許されるところがといふ取り越し苦労。

扉

の堀内一郎俳句は「白樺」と題する作品十句のなかから。私も三平峠を越えた。「ポンポン舟太蘭の中に水路あり 喜孝」に首を傾げた。尾瀬沼にポンポン船が走っていたのだらうか。「雷鳴に山容変り写生仕舞ふ 石艸」画家がスケッチをしてゐる脇で他の人は小休止。『水音』はよく山歩きをした。奥鬼怒の蟹湯は特に懐かしい。石を囲炉

裏で赤く透き通るまで焙りその上に味噌で土手を作り魚や茸を入れ食した。連れて行って貰はなければこんな楽しい想ひも残らなかつた。

俳

境流連の原稿お待ちしてゐます。自句をきつかけにした随筆、自句の解説に陥らぬやうお書き下さい。枚数、締め切りありません。よろしくお願ひします。

〈喜孝〉

二〇一六年九月号

発行日 九月五日
 発行所 東京都中野区中央2-50-3
 電話 090-9828-4244
 ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／松村美智子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。